

回廊をわたる風

義田 葵

「ご搭乗の皆様、当機はまもなく岡山桃太郎空港に向けて離陸いたします……」

シートベルト着用サインが点灯し、軽やかなアナウンスが故郷行きの機内に流れた。父の葬式のため日本に帰国した私は旅の慰めにと、数冊の文庫本を買い求めている。海外に暮らしていると時々無性に日本の伝統的な古典が読みたくなる。2024年春、私と更級日記との旅はこうして始まった。

昨年、父が入院したのは、精錬所や造船所が見える瀬戸内の海辺に立つ病院だった。一昨年に逝った母とはとうに離婚していたが、浮いた話の一つや二つはあったものの再婚には至らなかった。身寄りには私と兄しかいない。病床の父からリクエストを受けて、私は彼の最愛の孫娘を連れて見舞いに駆け付けたのがつい昨日のように思い出される。

「定期検診に寄ったつもりが、まさかその足で入院になるとは思わなかったよ」

朝の陽光が差し込む窓から、街路樹のある明るい街並みが見えた。どうやら父は、広い大部屋を優雅に一人で使わせてもらっているようだった。意に反せず入院させられたことを少し憤慨して

いる様子にも見えた。面会の日の父は身体を清拭され、こざっぱりした部屋着を着せられていた。鼻に酸素の管は通されていたものの、いつもの父らしく饒舌^{じょうぜつ}だったことに気持ちが救われた。

「おじいちゃん、絵の描き方教えて」

最初は緊張していた娘もいつしか打ち解けて、スマホで自分が描いた絵を見せたり、自分が弾いたピアノ曲を聞かせたりしていた。病室で仲睦まじく紫陽花の色の塗り方を教えてもらっていたのが、今となつては微笑ましい最後の思い出。楽しかったけど少し疲れたという父を残し、私たちは好物のわらび餅とピオーネの房を置いて、病室を後にした。廊下はシーンと水を打ったように静かで、そのホスピスのような最終病棟の隣室には、恍惚然とした老人が横たわっているのが見えた。

毎日のように孫娘と見舞いに日参したのが功を奏してか、それから父の容体は好転したかに見えた。じゃあ元気でね、と私たちは別れた。だが、帰国して二度と父と再会することはなかった。兄の話では、入院先の病室から家に戻ることはなく茶毘^{だび}に付されたという。

今年もまた故郷の海辺は穏やかな水面を輝かせ、昔からの幼馴染のような顔をして迎えてくれた。晩春の緑豊かな山並みに沿って、霊園へと続く県道を走る。この道は、中高生の頃よく自転車を通った道だった。18歳まで住み慣れた小さな造船の港町には映画館や娯楽施設もなく、当時の私の生意気な知的好奇心を満足させてくれそうなのは何もなかった。学校と家を往復するだけの

単調な日々の中で、私の唯一の楽しみは校内や市内の図書館の本を端から端まで完読することだった。そんな道を今は父の白い骨壺を膝に抱え、兄の車で墓に向かっている。明るい朝の潮風がゆつくりと車内を満たしていく。

「子どもに迷惑をかけたくない」が口癖だった父は、生前に先祖代々の「墓じまい」を済ませ、由加山の麓の霊園に個人用の永代供養墓を買って求めた。由加山は桓武天皇の時代から朝廷の祈願所として栄えた神仏習合の霊山だ。瀬戸大橋からも遠くない自然豊かな山間にあり、近くには空海由来の由加温泉も湧き出している。

「お陰様で父も空海ゆかりの地で安心して永眠できると思います」

若く温厚な住職はよく通る声で経を唱えてくれ、その響きは賛美歌のように私の心を震わせた。線香の煙とともに山間の木々を揺らし、雲一つない青空に真つすぐ立ち上っていく。生前の父が「これからは、盆暮れ正月に墓参りで帰国する必要もないからね」とさも自慢そうに語っていたのを思い出す。この新しい霊園では、季節の節目には僧侶が経を唱え、墓参りのごみは管理者が清掃してくれるのだそうだ。駐車場から続く白い砂利道に塵ひとつ落ちていない。立つ鳥跡を濁さずというべきか、用意周到な親心には頭が下がるが、同時にもう私は必要とされていないように少し複雑な気分だった。納骨の疲れとともに、霊験あらたかな由加温泉の湯に浸かるとき、私の心の奥底に一抹の寂しさが沸いた。

その夜、私はワイングラスを片手に更級日記を読み直した。言わずもがな、菅原孝標女が平安時代の女の一生を猫いた自叙伝風の日記である。現実よりも空想に生きる夢見がちな少女期の自分と、厳しい現実に翻弄されながらも夫や子の出世を願う平凡な主婦の姿とを対比させることで、思春期から壮年期までの女性の共感を得やすい回想録にもなっている。

文学的な刺激のない上総国で、物語世界に住む光源氏や浮舟に憧れ、薬師仏を拝みながら京での華やかな暮らしを夢見た孝標女の少女期の気持ちは私にも痛いほどわかる。物語として楽しく読めるようにと脚色された部分はあるかもしれないが、節々に共感できる「あるある体験」のせいか、気が付くと夜更けていた。

寝しなにと、門出に際し孝標女が上総国に置き去りにしてきたという仏像の行く末が気になった。あんなに朝な夕な額を床にこすりつけて拝んでいたというのに、今はどこでどうしているのやら。仏壇を閉眼したばかりだからだろうか。瞼の裏に、置き去りにされた薬師如来の不安そうな立ち姿が、病室で最後に見た父の小さな後ろ姿とオーバーラップした。

国境を越える生き方を選んだときから、いつか親の死に目に遭えなくなることくらい薄ぼんやりと理解してはいた。帰国が近づくと喜び勇んでお土産を買うくせに、日本を離れるときは物寂しく感じるの、私のような海外生活者の本音だろう。父の遺品を整理するということは、地球上の居場所を失くしたように寂しくて堪らない。乳母と別れ、継母や親しい親族を次々と失くし、晩年には夫に先立たれた孝標女の孤独が身につまされるようだ。朝

を迎えたとき、枕もとにワインボトルが空になって転がっていた。

それから帰国までの一月余り、私は父の供養にと吉備津彦神社はじめ近隣の神社仏閣巡りに出かけるようになった。ポケットに御朱印帖を忍ばせ、自然の中を歩き、手を合わせて一心に祈る。そうすることで、心を切り替えて帰り支度にかかれると思ったからだ。気分転換にと従妹の美容室で髪を切り、旧友たちと毎日のように会って他愛もないおしゃべりを愉しんだ。女子会とはいえ、結婚してからは恋バナも咲かなくなって久しい。彼女たちは一様によく喋り、快活によく食べ、屈託なく笑った。そして、他人の噂や陰口を決して言わないという暗黙のルールが、この20年来の友情を育んでいる秘訣だろう。

更級日記にも、飾らない言葉で紡がれた平凡な主婦生活の描写とは別に、しっとりとした女心の機微を記した章がある。宮中で出会った琵琶の名手で知的な貴族男性との和歌のやり取りの描写だ。現実の色恋には消極的な孝標女だったが、その資通卿との再会を喜ぶシーンは余人に例を見ないほど美しい。きつと自分史ともいえる日記にそつと書き加えて残したかった大切なエピソードなのだろう。

帰国前に更級日記の聖地巡礼の旅を思いついたのは、孝標女の導きであろう。羽田空港からも成田空港からも行き易いという理由もあるが、史跡「上総国分尼寺跡」の復元回廊をぜひ一度自分

の足で歩いてみたかった。

房総半島のほぼ真ん中に、国分寺や国分尼寺が建てられたのは奈良時代のことだという。異常気象や天変地異による飢饉や天然痘によって荒廃した世の中を仏教の力を借りて立て直そうとしたのが、次々と地方に国分寺が建立された理由だ。まさに地球温暖化や感染症など今の世界が直面している問題とも酷似してはいまいか。

更級日記には、1021年には伝染病が流行して多くの人が亡くなったという記述がある。上総国から京へ戻る途中に生き別れた乳母が、このときの疫病で命を落としたというから孝標女はさぞ氣落ちしたことだろう。情感豊かな彼女は悲しみに暮れるあまり、あんなに読みたがっていた物語を読みたいという気持ちさえも失せてしまい、次のような歌を詠んだという。

「散る花もまた来む春は見もやせむやがて別れし人ぞ恋しき」

回廊に一步足を踏み出すと、弁柄の朱色で塗られた鮮やかな柱が目を惹く。「天平の甍」を彷彿させる唐草文様の平瓦や蓮華文様の丸瓦が積まれた壮麗な屋根の裏板には白い胡粉が塗られている。連子子の鮮やかな緑色のコントラストも妙である。壮麗なこの回廊を孝標女も歩いたかもしれないと思うと、感慨もひとしおだ。ただし、目の前に再建された尼寺は一般庶民に開かれた場所ではなく、貴族たちの抛り所として学問所や寄合所に使われたものだそうだ。庶民に寄り添うような寺の形ではなかったため、長い歴史の中で人心を離れ、いつしか忘れ去られてしまった。市原市はそんな文化遺産を後世に伝えようと千年の時を経て命を吹き

込み、蘇らせたことになる。そう考えると、なんだか少し胸が熱くなった。

私は流行病のせいで母の死に目にも会えず、死の淵にいた父の手も握ってやれなかった。最後にもっと優しい言葉をかけてあげればよかった。生きている間に好物を食べさせてあげればよかった。そう思うと、それまで堪えていた感情があふれ、涙が次から次へと零れた。今日まで私は故郷で平然な顔をして淡々と遺品整理などをこなしていたものの、父の死を心の底からちゃんと悼んだだろうか。心のどこかで寂寥とした思いを整理できずに、本当は深く傷ついていたのではないだろうか。ポケットにいつも更級日記を忍ばせていたのはそのせいで、孝標女と共に旅してきたことで、自分でさえも気づかず癒されてきたのかもしれない。

死の瞬間、人は自分の人生を走馬灯のように七分間の映像として見るという。この説の化学的背景には、脳の酸素不足状態が原因で過去の記憶が急速に活性化される現象が根拠になっているのだそうだ。父は病室でどのような映像をひとり見たのだろうか。孝標女は夫を失くした更級の地で、一体どのような人生最期の短い物語を見たのだろうか。

少しばかりの遺灰を小瓶に詰めて持ち帰り、せめて孫娘と映った笑顔の父のスナップ写真の横に飾ろうと思う。園芸が趣味だった父は、バラの花々に満ちた我が家の庭を好きになってくれるだろうか。そんなとりとめのないことを尼寺の回廊を歩きながら考えた。傷ついていないふりをしてこれまで忸怩として抱えていたものが心の中で柔らかく溶けていくのを感じた。真っすぐ空港に

向かわず、途中下車して聖地巡礼に訪れた私を称えるかのように風が吹いた。回廊の風は、やさしく旅人の頬を撫でて通り抜ける。

来るときは五井駅からタクシーを捕まえたが、帰りはゆっくり歩いて戻ろうと私は思った。幸い帰国便は三日後なので、急ぐ旅ではなかった。史跡を訪ねた足で、千葉の何もない海岸に足を運ぶのもよいだろう。平安時代といえ、旅立ちの前には吉方に方互いをして支度を整えてから出発したらしい。孝標女も門出の日には仮に家を出て、附近に一泊もしくはしばらく逗留してから京に向かったそうだ。西に海が見えたというから、市原からも近い袖ヶ浦あたりだと考えられる。千葉の沿岸には海水浴場が点在しており、少し足を伸ばせばサーフィンの聖地として名高い九十九里の釣ヶ崎海岸に辿り着く。青木繁の「海の幸」という作品も、館山の布良海岸にて制作されたというから、千葉の海辺はインスピレーションを刺激して幸福な時間を育むのにふさわしいのかもしれない。

道端の立ち葵は、ちょうど13歳の少女の背丈くらいだろうか。うつむきがちな葵の花びらが風に揺れるとき、照れ臭そうに微笑んだような気がした。